
居場所は・・・

雲天道風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居場所は・・・

【Nコード】

N4806Y

【作者名】

雲天道風

【あらすじ】

手首を怪我させられたことが原因で、テニス部をやめた風鎖は、毎日繁華街をフラフラしている。そんな風鎖にキャプテンは戻るように説得する。強がりな風鎖の思いは揺れ動いていき・・・

1話

生きてて楽しい？

そう聞かれてあたしは、『いいえ』と答えた。
なら、死にたいのか？

そう聞かれてあたしは、『いいえ』と答えた。

生きてるのが楽しくないⅡ死にたいと考えるのは、あまりにも飛躍しすぎている。

生きているのは楽しくないが、生きていたいと思う。

これも矛盾なのかもしれない。

だけど、あたしはそういう考えだ。

今日も繁華街を歩いては、絡んでくるチンピラを殴り倒している。
毎日同じことの繰り返し。

楽しくない毎日だ。

別にあたしは喧嘩をしたいわけじゃない。

向こうが絡んでくるから、正当防衛をしているだけだ。

何が楽しくて、毎日喧嘩何か・・・

今日はゲームセンターに来た。

一人でUFOキャッチャーをしていると、また来た。
ガラの悪い連中だ。

『こんなところで、一人で何してんの？』

『俺たちと一緒に遊ぼうぜ』

何が遊ぼうだ。お前らの遊ぼうは、遊ぼうじゃなくて、遊ばせろ。
の間違いだろ。

『ふざけんな』

そして、またあたしはいつもの如く。

チンピラ共を滅多打ちにするのだが・・・

『こら、そこで何やってる！』

何て運の悪いことか。

これがお店の外の機械の前だからか。

珍しく警官にみつかつてしまった。

逃げるが勝ち・・・

『こら、待ちなさい』

全速力で逃げる。

『待つわけないでしょ』

塀を軽々と乗り越えれば、警官はもう追って来なかった。

『警官だったらこれぐらい出来るようにしておくことね』

塀の向こうに叫べば、何だかすぐ爽快な気分になった。

あたしは別に悪いことをしたわけじゃない。

ただ向こうが絡んでくるから、正当防衛をただけだ。

だからあたしが警官に捕まったって、何の罰にもならない。

だから、今のはただのおいかけっこに過ぎない。

このまま家に帰るにはマダ時間が早すぎた。

時間をどこでつぶそうか。

悩んでいると、会いたくない人にでくわした。

『風鎖ちゃん』

あれ以来一度も顔を合わせたことはなかった。

そう、あたしがテニス部を止めて以来、一度も・・・

あたしはその場から逃げるようにして立ち去った。

『ちよっと、待って』

後ろからの声は、聞こえないふりをして・・・

あれは数ヶ月前の話だった。

あたしは全国大会に行くのが夢だった。

テニスは小学生の時からしていた。

この高校は、テニス部の過去の功績も良く、大会にいけるのが待ち遠しかった。

実際あたしは、1年生にしてレギュラーに選ばれた。

それは、テニス部キャプテンのおかげだった。

キャプテンは頭もよく、容姿もよく、皆の憧れの存在だった。

あたしもキャプテンのことが好きだった。

『あらおかえり、今日は早いね』

『うん。友達が今日からバイトみたいだから、早めに切り上げたの』
『そう』

母には勉強をがんばってることにしていた。

右手首を痛めて、テニスが出来ないようになったからだ。

だから母は、手首が完治するまでは勉強に励みなさいと言った。

実際のあたしは何にも励まずに、毎日ぶらぶらしている。

勿論そのことは、母には言っていない。

手首が完治したところで、あたしはもうテニスをする気はない。

翌日学校に行くと、いつもの如く仲の良い友達がすぐにあたしの元に来た。

『おはよう。今朝は手首の調子どう？』

あたしの小学校の頃からの友達で、誰よりもあたしの夢を応援してくれている。

この子にも、あたしがテニス部を止めた本当の原因は言っていない。

『うん。まあまあかな』

『そっかあ。早くテニス出来るようになるといいね』

『ありがとう』

素直に応援してくれる美紀に、あたしは何も言えなくなる。

言ったら美紀は、どんな顔をするのだろうか。

『ごめん美紀。1限目は授業休むよ』

『やっぱり手首痛いのか？』

『そうじゃないけど、少し休ませようと思って・・・』

『そっか。わかった。先生には言っておくね』

当初は、ペンも持てず、美紀にノートを写してもらっていた。

どうせ授業を受けなくても、このバカ学校では単位を落とすことなんてない。

テストでいい成績をとればいいんだから。

それに、欠席と欠課での差は随分大きく、欠課はそれほど落とされないらしい。

あたしは屋上に上がった。

テニス部を止めてから今まで、あたしは一度も授業をサボることはなかった。

だけど、今日は受ける気分にはならなかった。

昨日、あの人にあつたからかもしれない。

『あれ？ 風鎖ちゃん』

会いたくない人に2度も会う何て・・・

『風鎖ちゃん。テニス部に戻ってこないか？ 俺のことをマダ怒っているのか？』

この人がテニス部のキャプテンだ。

『あたしはもう、二度とテニスはしません』

『手首は日がたてば治るはずだ。その後でもいい。君をテニス部からなくすのはあまりにもおしい』

『そんなこと言って、貴方はあたしの体がほしいだけなんですよね』

『あれは・・・』

気分が悪くなった。

今日は授業欠課じゃなくて、欠席にしてもらおう。

担任はあたしの授業遅刻も、他の人よりも甘くつけていた。

そんなひいきしてほしくない。

レギュラーに選ばれて、1年の子からは熱い支持を受けていた。皆自分になりたかった。とは思わなかったみたいで、あたしに頑張れ。を言い続けてきた。

それとは反対に、先輩からの嫉妬はひどかった。

レギュラーになる以前に、キャプテンに気に入られてることが気に入らなかったみたいだ。

実際、キャプテンは1年の中であたしだけをレギュラーになれるように育ててきた。

あたしの素振りを見ただけで、キャプテンは『俺とラリーをしてみろ』と言ってきた。

その時は、あたしが一番驚いた。

そして、同時に嬉しかった。

1年で、いきなりキャプテンと打ち合える何て、夢のようなことだと思った。

『俺とラリーを100回続けられたら、明日からお前だけの特別メニューを作ってやる』

その言葉を信じて、あたしはキャプテンとのラリーを続けた。

『頑張って』

1年からは期待の込められた応援が送られ、先輩からは冷たい視線を浴びた。

そんな中あたしは、見事に100回続けることが出来た。

『まさかここまで出来るとはな。君には期待しているよ』

キャプテンに認められて、あたしはすごく嬉しかった。

しかし、その日からある先輩からの、猛烈ないじめを受けた。

『ほら、一年はボール拾っておいでね。風鎖ちゃんはおちよっこっち来てくれるかな?』

『はい』

副部長のちか先輩は、とても綺麗で、女子の憧れの的だ。

『あたしのラケットのガット張り替えについて』

『えっ、あたしがやるんですか？』

『文句あるの？』

『いえ・・・』

ガットの張替えを自分ではしたことがなかった。

たいていは皆お店に任せるだろう。

なのに、もう部活が終わる18時からすると、帰るのは21時を過ぎるかもしれない。

だけど、他でもないちか先輩の頼みだ。

ちゃんとしないと。

憧れだったちか先輩からの頼み。

あたしはこの時、ちか先輩はあたしにガットを張る練習をさせているんだと思ってた。

それが、嫌がらせの始まりだなんて、微塵も思っていなかった。

皆が着替え終わり、部室から帰っていても、あたしは一人ガットの張替えをしていた。

やったことはなくても、初めてのガット替えの時に、お店の人にやり方を見せてもらっていた。

ずいぶん前のことだけど、感覚で出来るかもしれない。

そう思っ一人頑張ってみた。

『それじゃよろしくね。鍵最後閉めとくのよ』

『はい』

もう生徒は全員帰ったのだろうか。

辺りは静まり返っていた。

その日は家についたのは結局22時だった。

あたしは最初から、テニス部には居場所がなかった。

もっと早く気づいていれば、誰も傷つかずにすんだのに・・・
今更思ったってしょうがないよね。

キャプテンがあたしに優しくかったのも、あたしに期待していたから
じゃなかった。

そう思うと、数ヶ月がとても無意味なように感じられた。

今も無意味な生活しか送っていないけれど・・・

もう、あんな人たちと一緒にテニスはやりたくない。

あたしは夏の大会を間近に、怪我をしてしまった。

いや、怪我をさせられてしまったのだから。

2話

ちか先輩から毎日のように雑用を押し付けられていたある日。

ちか先輩はあたしに試合を申し込んできた。

『あたしに負けたら、レギュラー降りてね。1年がレギュラーなんて、とても迷惑なの。』

先輩たちのこと考えてみなさい。レギュラーになれたかもしれない人が、あなたのせいでなれなかったのよ』

『そんなことを言われても、あたしが選ばれてしまったんだから、しょうがないんじゃないでしょうか？』

あたしはいつでも強気だった。

意地っ張りで、誰にも弱さを見せたくない。

バカな奴だ。

『まあ、でも。あたしに負けるぐらいなら、大会ですぐに負けちゃうから、出ないでよね』

『そんなこと・・・』

ちか先輩はキャプテンの次にうまかった。

そんな人に勝てるのか？

あたしは不安と、同時に試してみたいという気持ちがあった。

『わかりました』

この時の好奇心が、あたしの人生を狂わせた。

ちか先輩の送りだすボールは、常にあたしの体の位置だった。体の位置は取りにくいボールだ。

だから、ちか先輩はそこにばかりボールを送っている。

それぐらいにしか思っていなかった。

何回かラリーを続けていると、一瞬の動きの迷いをつかれ、見事に顔面にボールが的中した。

ちか先輩のボールの威力はすさまじく、あたしは少し後ろに飛ばされた。

『くっ・・・』

『何よ、その顔。あたしがもしかして、わざと当てたって思ってる？』

『いいえ』

この時に確信した。

この人はあたしの体を傷つけようとしている。

そうして、大会には出さないつもりだと。

その気なら、あたしは全力でボールを返せばいい。

だけでも、それは簡単なことではなかった。

すでに2セットとられそうなところまでいっていた。

あたしの点は全く入っていない。

『さっきまでの強気はどうしたのかしら？』

『今からでも追い抜いてみせます』

そこからあたしは、踏ん張り続けて、見事に1セットとることが出来た。

『どうですか？』

『生意気ね。でもまだ1セットでしょ。そんなの取る前に、あたしが勝つに決まってるのよ』

ちか先輩からの余裕はなくなっていた。

少し焦っているようにも見えた。

あたしも思った。

ちか先輩に勝てるかもしれない。と・・・

だから、ちか先輩はあんなことをしたのかもしれない。

『さあ、ちか先輩からのサービスですよ』

『調子に乗ってられるのも今のうちよ』

ちか先輩からの強烈なサーブは、バウンドをつけることなく、そのままあたしの方へと・・・

『ぐっ・・・』

あたしは右側に倒れこんだ。

『うっ・・・』

ちか先輩のサーブが、あたしの右手首に当たったのだ。

『さあ、立ちなさいよ。あたしに勝つんでしょ』

右手がしびれていて、動かなかった。

こんな状態でテニスを続けられるわけがない。

そう思ったけど、あたしは必死に立ち上がろうとした。

ちか先輩は、そんなあたしをあざ笑いながら近づいてきた。

『おっと、ごめん。手が滑っちゃった』

『うわぁ！・・・う』

『わざとじゃないよ。ごめんね』

ちか先輩は、あたしの手首目掛けて、ラケットを落とした。

『ちか先輩・・・汚いですよ。そこまでして・・・』

『何よ。調子のもてんじゃないわよ。もう二度とテニスできないようにしてやる！』

もう一度先輩が勢いよく、ラケットを振りかざそうとした時、誰かの手がちか先輩の腕をつかんだ。

『何をしている』

『キャプ・・・テン』

ちか先輩はキャプテンを見て、青ざめた顔になった。

もう皆帰ったはずなのに、一番見られたくない人に見られてしまった。

おおよそんなことを思ったに違いない。

『風鎖ちゃん。大丈夫か。とりあえず保健室にいこう。君はそこに残っている』

初めてキャプテンの怒ったところを見た。

練習中はすごく厳しいけれど、すごく優しい人で、怒ったところなんて誰も見たことがなかった。

だからあたしは嬉しかった。

それなのに・・・

保健室に行くと、すでに保健の先生は帰っていた。

『シップだけでも張っておいたほうがいい』

『ありがとうございます』

『そのソファ―に座っている』

キャプテンがあたしの為に・・・

ちか先輩はキャプテンの幼馴染だった。

仲の良いあの二人を、恋人同士だと思う人も少なくはなかった。

『キャプテン・・・あの、さっきのことは』

『何も言わなくていい。ちかが君に試合を申し込むと言ったから、おかしいと思って見た。』

だから、すべてわかつている』

『そう、ですか・・・』

キャプテンはあたしじゃなくて、ちか先輩を心配していたに違いな
い。

『ほら、腕を出せ』

『ありがとうございます・・・』

『それにしても、これじゃあ今回の大会には出られないかもしれないな
いな』

『そう、ですね・・・』

楽しみにしていた大会に、あたしはこんなことで出場できなくなっ
た。

『ありがとうございます。あたし・・・帰ります』

『風鎖ちゃん』

『えっ?』

キャプテンが、いきなり顔の間近までせまってきていた。

一瞬頭が真っ白になった。

気づけばキャプテンにキスをされていた。

えっ、何で? 何でこんなことになってるの?

『キャプ・・・テン?』

何で、何も言わないの?

『ちよっと・・・』

キャプテンはあたしのことを押し倒そうとした

『やめてください!』

『っ・・・』

気づけばキャプテンを力いっぱい、吹っ飛ばしていた。

『何考えてるんですか』

『君が好きだ』

『へっ・・・』

キャプテンがあたしのことを?

それにしても、いきなりこんなこと・・・

『キャプテンは、あたしの体が目当てだったんですね。失望しましたよ』

『そうじゃない!』

『言い訳は聞きたくないです』

悲しかった。

バカみたいだ。

キャプテンに認められたって、勝手に勘違いしてたんだ。

昼間に繁華街をぶらぶらするのは初めてだった。

チンピラはいないだろう。

そう思っていた。

だけど、あたしの考えは甘かったみたいだ。

『あれあれ、高校生はこの時間学校だよねえ? ああ、そっかあ。おじさんたちと遊ぶために来たんだね』

めんどくさいなあ・・・

毎度毎度、何で絡まれるのかなあ。

『こら、高校生が何してんだ』

『げっ、この前の警官だ』

あたしよりも早く、その連中は逃げて言った。

おおよそ、ヤクザの類だろう。

『大丈夫か』

『あなたは、あたしを怒りに来たのか。守りに来たのかどっちなん

ですか？』

『どっちもだ。学校はどうした？サボったのか？』

『さあね』

大きなお世話だ。

そこら辺のヤンキーたちと一緒に扱いをされたくない。

あたしは別に、遊びたいわけじゃに。

ただ時間をつぶさなければならぬからだ。

『親に連絡するから、住所と名前と電話番号教えなさい』

『いやです』

『なっ、警察をなめているのか』

『プライバシーの侵害ですよ』

『君ねえ』

ながいするのは面倒だな。

別の警官を呼ばれても困るし・・・

『それじゃあね』

隙について逃げた。

相手は自転車に乗ってるから、速度は速くても、狭い道は通れない。

自転車を降りたとしても、そのロスした時間であたしには追いつけない。

足は速い方だと思っている。

警官の姿は後ろには見えなかった。

ヤクザにまで絡まれるようになるとは面倒だ。

しばらくは繁華街をうろつけないな。

でも、どこに行けばいい？

また携帯が鳴り響いている。

メールの未読数はすでに50を超えていた。

すべてテニス部の1年からのものだ。

中身は見えていないけれど、きっと戻ってこいとか。そんなものだと思う。

あたしが辞めた原因を知っているのは、関わった二人だけだ。
言う気にもならないけどね。

プルル

知らない番号からの電話だ。

誰だろうか。

『はい』

『風鎖ちゃん。俺だけど、急にごめんね。だけど、君ときちんと話
しがしたいんだ。』

あのときのこととも謝りたい。誤解も解きたい。君に戻ってきてほし
い』

誰と聞かずもわかる。

キャプテンからだ。

おおよそ、あたしの番号は1年の誰かにでも聞いたのだろう。

『何度言われても、あたしはテニス部に戻る気はありません。それ
に、謝って頂かなくて結構です』

『風鎖ちゃん。君が怒るのもわかる。でも、君みたいな人がテニス
を辞める何て勿体ないよ』

『あたしは・・・貴方たちとはもうしたくないって言ってるんです』

『君が戻ってくるのなら、もう近づかないよ』

『そういう問題じゃないんです』

そう言って電話を切った。

正直あたしはキャプテンに失望をした。

けれど、キャプテンのことを嫌いになったわけじゃない。

けれど、テニス部には戻れない。

あたしは意地っ張りで、強がりな、ただの女の子。

『君のことが好きなんだ。ずっと前から、君のことが好きだ』

『何を言ってるんですか』

『さっきは悪かった。だけど、本気で愛してるんだ』

『聞きたくないです』

今そんなことを言われても、少しも嬉しくなかった。
何を考えているんだ。

そんな思いしかなかった。

『キャプテンは、ちか先輩のところに行ってあげるべきです』

『何言ってるんだ』

『ちか先輩はキャプテンのことが好きなんですよ。あたしになんて構わなくていいんですよ』

本気でキャプテンがあたしのことを好きだなんて、考えられない。
素直に喜べない。

あたしは、キャプテンのことが本当に好きだったのだろうか？

部屋に戻ろうとすると、コートでちか先輩が泣いているのが見えた。
キャプテンに見られたことが、相当ショックだったのだろう。

慰めてもらえばいい。

二人でうまくやればいい・・・

その時にあたしは決意した。

一度に二つの物を失って、あたしは泣き崩れた。

テニスが出来なくなったことが、あたしにとっての一番の悲しみだった。

小さい時から、テニスのことだけ考えて生きてきた。

テニスを奪われることは、あたしの生きる意味を奪われたのと同じことだ。

3話

翌日、あたしは練習には出なかった。

キャプテンも怪我をしたから来なかったと思ったのだろう。

あたしは、丁度部活が終わる時間に、コートに向かった。

片付けを始めていた部員たちは、驚いた顔であたしを見ていた。

『風鎖、手首大丈夫なの？それより、その格好・・・』

1年生から心配の視線を向けられた。

ちか先輩は明らかに嫌な顔をしているが、手首の包帯に目を向けると、申し訳なさそうな顔をした。

『風鎖ちゃん。どうしたんだ』

一番驚いていたのはキャプテンだった。

『キャプテン。あたしテニス部を退部します』

『何故だ。怪我なら日が経てば治るだろ。わざわざ辞めなくても』
『もう決めたことです。それで、キャプテンに最後のお願いをしに来ました。最後に、あたしと試合をしてください』

キャプテンと試合をしたことはなかった。

いくらレギュラーといっても、1年ということで、キャプテンとは組ませてもらえなかった。

さすがのキャプテンも、そこまでは手を回してくれなかった。

『そんな手首で俺と勝負する気か？』

『はい。大会に出れないんです。キャプテンに勝てれば自分の中で満足できますから』

『ちょっと！』

『随分俺もなめられたもんだな』

ちか先輩が何か言いたげにしたのを、キャプテンは制止して、楽しそうな表情をした。

『おもしろい。いいだろう。ちか、審判をしてくれ』

『えっ』

『いいから』

『うん・・・』

ちか先輩は渋々審判台にのぼった。

『他の部員は帰れ』

『は、はい』

1年生は心配そうな目を向けながらも、部室に戻っていった。

『キャプテン。全力でやってくださいね』

『ああ、当たり前だ』

あの時どうしてあたしはキャプテンと試合をしようと思ったのだろうか。

試合をすることで、何かけじめをつけようとしたのかもしれない。

今となってはそんなことどうでもいいけれど・・・

どこで時間をつぶそう。

もう、繁華街はいかないようにしよう。

チンピラはともかく、警官何てめんどくさい奴に捕まるのはごめんだ。

今家に帰れば、親に心配をかける。

もう一度学校に戻るのは気がひける。

あたしは公園へと向かった。

そこは小学校の頃によく行った公園だ。

この辺りで唯一テニスコートのある公園で、あたしはそこで毎日練習していた。

ここに来るのは、もう何年ぶりだろうか。

中学に入ってから、部活で毎日やっていたから、きっとここでは練習していなかったはずだ。

平日の昼間でも、大人たちがテニスをやっていた。
プロだろうか。

それとも何かのサークルか何かだろうか。
すごく上手かった。

あたしは久しぶりにテニスを見て、のめりこんでしまった。
気づけばテニスコートの近くまで行っていた。

『ずっと見てたのかい。よかったらやってみるかい？』

試合が終わったところで、かたつぽの男が近づいてきた。

『あつ、いえ・・・すいません。ただ見ていただけなんで・・・』

あたしはその場から逃げるように立ち去った。

もうテニスはしない。

そう決めた。

あんな人たちの中でテニスはしたくない。

他のところでもいくらでもテニスは出来る。

だけど、あたしはそれをしようとはしなかった。

したくなかったのかもしれない・・・

やっぱりどこに行っても、あたしの居場所はないんだ。

最初に言っただけでも、あたしはもしかしたら生きていたくないの
かもしれない。

死んでしまいたいかもしれない。

飛び降りるのなら、学校の屋上がいいな。

テニスコートを見下ろしながら、遺書でも書いてやろうか。

ばかばかしいと考えながらも、あたしの足は自然に学校へと向かっ
ていた。

門の前に来てはっとした。

『バカじゃないの。あたし・・・本気で、死ぬ気なの？』

怖くはなかった。

ただ、少しだけ悲しかった。

あたしの人生は最後まで無意味なものだったのだと思うと、悲しく

て仕方なかった。

一度学校から帰ってきたのだから、教師にばれては面倒だ。
あたしは足を忍ばせながら屋上に向かった。

『風鎖ちゃん』

『キャプテン。何で・・・マダここに？』

今は4限目あたりだろう。

『ああ、今日は俺のクラス学級閉鎖なんだよ。ところで、君は・・・
帰ったんじゃないかったのか』

『関係ないじゃないですか。どこかに行ってもらえませんか』

『行くところがないんだろう。昨日俺のちよつとばかり悪い友達に
君の噂を聞いたんだ。』

毎日繁華街を歩いて喧嘩して・・・何か楽しいのか？それはテニス
よりも楽しいことなのか？』

そんなはずがない。

したくてしてるんじゃない。

ただ、時間をつぶすためにしていた。

キャプテンはおおよそ、そのことをわかって言っているのだろう。

『テニスしたいんだろう』

『ちよつと』

キャプテンは近づいてきて、あたしの右手首をつかみあげた。

『ほら、もう痛くないんだろう』

『だったら何ですか。もう痛みは感じないですよ。日常生活してる
分にはね』

『素直になれよ』

『あなたのいるテニス部に、戻る気にはなれません』

『君がテニス部を辞めるなんて、その考えを覆させてやるよ』
キャプテンは容赦ない攻撃だった。

普通に試合してもとれないようなサーブ。

反応すら出来なかった。

『1セットで終わらせたくならせてやる』

キャプテンのサービスは、すさまじい速さで入った。手首のこと以前に、あたしは反応すら出来なかった。

『くそ』

『やめるか？』

『いいえ』

次のサービスは、いきおいよくあたしの方へとんできた。

あたしはすかさず、ラケットを顔の前に向けた。

ボールはすごい威力を持っており、重かった。

両手で持っても、右手の痛みに負けてしまう。

『うわあっ』

そのまま後ろへと飛ばされた。

『くっそ・・・』

『やめたほうがいいんじゃないか』

『やめません。やめるわけない』

本当は、この人はあたしに戻ってきてほしくないんじゃないのか。

すぐに1セットはとられ、後15で2セットをとられるところまで来ていた。

あたしの手首は限界まで来ていた。

一回だけラリーを続けられたが、5回で入れられてしまった。

『やめておけ、もう二度とテニスが出来なくなるぞ』

『余計なお世話です。もう二度とテニスはしない』

今少しだけ違う思いが出てきた。

もしかして、キャプテンがわざとあたしを狙っていたのは、早く試合を辞めさせるためだったのかもしれない。

『ここから巻き返せばすむ話です』

ちか先輩の時と、同じ状態だ。

そして、今のあたしはその状態よりも最悪な状態だ。

『あたしなら出来る』

そう信じて、あたしはラリーを続けた。
ほとんど左手に力をこめて、右手が壊れるのもおかまいなしに、あたしはラケットを振り続けた。

『よっし！』

あたしは何とかして1セットとることが出来た。
すでにあたしの体力は限界まできていた。

右手首が腫れてきた。

『もうやめろ』

キャプテンは、ラケットを投げ捨てて、こちらに駆けつけてきた。

『右手が腫れてるじゃないか。これは・・・』

キャプテンはあたしの手首をつかんで、青ざめた顔をした。

その顔を見た時に、あたしは少し嬉しい気持ちになった。

してやった。そんな思いだ。

それと同時にあたしの意識は遠のいていった・・・

目が覚めると、そこは保健室で、右手首にはしっかりと包帯が巻かれていた。

起き上がると、テーブルの上に紙がおかれていた。

＜キャプテンの俺が、君の怪我の状態を知りながら悪化させてしまったことは、大変申し訳ないと思っている。

怪我が完治したら試合の続きをしよう。君の退部はキャプテンとして認めない＞

そう書かれてあった。

そんなこと言われてもな・・・

あたしの手首は折れていた。

そんな状態で試合をしたんだ。

悪化しないわけがない。

テニスはもうしない。

そう心に誓った。

4話

『俺はあの時の約束をはたしたい』

『約束？あなたが勝手に紙に書いただけじゃないですか。あたしは、もう貴方と試合をするつもりはないです』

『君は途中で試合を放り出すのか？』

『あの時の試合は、あなたの勝ちでいいです』

『なら、俺はキャプテンはやめられないな』

キャプテンが楽しんでいる気がした。

こっちは不愉快なのに・・・

『誤解を解こうと思う。俺は真剣に君のことが好きだ。今でもな』
突然何だ。

『ちか先輩とうまくやればいいじゃないですか』

『ちかのことなら気にするな。あの後きちんと断った』

『そうですか』

この人は本当にあたしのことが好きなのか。と、思えてきた。

だけど、そんなことはない。

それに、あたしがキャプテンと付き合っても、今はどうにも出来ない。

『君からの返事を聞かせてくれないか』

『あたしは何度も否定してるじゃないですか』

『けど、君から俺のことは好きじゃないとは聞いていない』

それもそうだ。

だって、あたしの心の中にはマダ迷いがあるのだから・・・

『あたし、今日ここに死のうと思ってきたんです。このテニスコートの見える上から、笑いながら死んでやろうって・・・』

そう思っていたんです』

キャプテンの顔から表情が消えた。

『それは・・・俺がおいつめたのか』

『はっ？』

『俺が君をテニスが出来ないようにしたから、それなのに、俺は君の気持ちも知らないで、君にテニス部に戻るように言ったから・・・』

キャプテンの本気に、あたしは何だか覚めてしまった。

この人の前で飛び降りてやろうかと思ったけど、そんな気持ちもなくなった。

『勝手に勘違いしないでください。冗談ですよ。あなた方の為に命捨てたくないです』

『風鎖ちゃん！』

さっきまで、悲しそうな顔をしていたキャプテンが、今度は怒った顔をしていた。

キャプテンの怒った顔を見るのは、これが2度目だ。

『そんなこと、冗談でも言うんじゃない。君には生きる権利があるんだ』

『権利があっても、生きる意味はないですけどね』

『またテニスをすればいい』

『だから、あたしはテニスなんて・・・』

『お願いだ。君が必要なんだ』

キャプテンはあたしを抱きしめた。

『ちよつと』

『何考えてるんですか。離れてください』

『今回は俺を突き飛ばさないのか』

『力が出せないだけです』

ガチャン

扉の開く音が聞こえた。

誰かが入ってきたみたいだ。

あたしは恥ずかしさに、キャプテンから離れた。

『力あるんじゃないか』

キャプテンは嬉しそうに微笑んだ。

『あんた達、こんなとこで何してんのよ』

入ってきたのは、不運にもちか先輩だった。

『何だちかか。あれ？もう休み時間か』

『そうよ。とつくにね。学級閉鎖をいいことに、こんなところで後輩といちゃついてたってわけね』

『あたし・・・帰ります』

『どこ行く気よ。キャプテンに色目つかって、そこまでしてレギュラーになりたいの？テニス部辞めたんでしょ！』

『ちか！今の風鎖ちゃんに謝れ』

キャプテンはすごい剣幕で怒った。

あたしのためにキャプテンが怒ったのは、これで3度目なのだろうか・・・

『何よ！二人でラブラブになればいいじゃない。あたしは始めから邪魔だったんでしょ』

『変な勘違いをしていたいては困ります。あたしはキャプテンとは何の関係ありません。』

それに、もうテニスをやるつもりもありません。ちか先輩にはもう何一つ迷惑をかけませんから・・・』

もうあたしにはテニス部何て関係ない。

本当に死んでやればよかった。

結局あたしは二人に巻き込まれただけだったんだ。

どうして期待してしまったのだろうか。

もう期待はしていないはずなのに、もうテニスはしないはずなのに、キャプテンのことも、もう・・・

この学校にいること自体が二人にとって迷惑なんだ。

そして、あたしにとっても・・・

『風鎖・・・あれ？今日は先生が帰ったって言ってたけど・・・』

門を出る前に美紀に会ってしまった。

『帰ったよ。ちょっと保健室に行っただけだよ』

『そっか・・・大丈夫？また痛んできたの？』

『まあ、ね・・・』

いつものように笑顔を作ることが出来ない。

美紀には心配かけたくない。

いつもみたいに笑顔でいてよ。あたし・・・

『風鎖？』

気づけば頬に冷たいものが流れていた。

あたし、どうしたんだろう？

何で今更・・・

そう思っても、涙は一向にとまらなかった。

何に對して悲しいのか。

それすらも自分にはわからない。

『風鎖・・・やっぱり何かあったんでしょ。あたしで良かったら話し聞くよ？あたしを頼っていいんだよ』

その言葉に、涙がまた溢れてきた。

美紀には心配かけたくない。

迷惑かけたくない。

そんなことばかり考えて、毎日作り笑いを浮かべていた。
どうしてだ？

美紀は友達じゃないか。幼馴染じゃないか。

誰よりも一番に自分のことを理解してくれる相手じゃないか。

それなのに、どうしてあたしは・・・

そう考えると行動は早く、気づけばあたしの口は動いていた。

『あたし・・・テニスやりたいよ。テニス部の皆とテニスやりたいよ。本当は、ちか先輩のことも、

キャプテンのことも大好きだよ。憧れの人たちと一緒にずっとやりたいよ』

『風鎖？』

美紀はテニス部であることを知らない。

テニス部の仲間ですら、このことを知らないのだから無理もない。

『全部話して、風鎖が抱え込んでること、あたしが力になれるかはわからない。』

でも、一人で溜め込むのはよくないよ』

美紀はあたしを抱きしめながら、優しく言ってくれた。

美紀の優しさが胸に染みる。

あたしはテニス部での出来事を全て話した。

『そっか・・・そんなことがあったんだ。でも、それでもその二人のことが好きっていうのは、すごいと思うよ。』

あたしはその人たちを実際には見たことないからわからないけど、あたしだったら絶対嫌いになってるよ。

風鎖はもつと素直になった方がいいよ。何も強がることなんてないよ。それに、ちかさんに遠慮することが

本当にちかさんの為になると思う？』

『それは・・・でも、それだけじゃないよ。その時は確かにその気持ちと、失望したからだけど・・・』

でも、今は違うの。今のあたしはキャプテンと一緒にいれるような人じゃない。迷惑になるだけだから』

あたしがそう言うのと、美紀は怒った顔になった。

『風鎖。しっかりしてよ。あたしの知ってる風鎖は誰にも遠慮なんてする子じゃない。』

自分の思うまま、自分のしたいままに何でも実行する子でしょ？憧れのキャプテンだよ。

付き合わないでどうするの。釣り合わないとか、迷惑とか、そんなことよりも、キャプテンが誰を好きか、

風鎖が誰を好きかってことでしょ？両思いなのに付き合わない何て勿体無いでしょ』

キャプテンにこのことを言ったら、きっと一緒のことを言われると

思った。

だからあたしは何も言わなかった。

キャプテンは優しい。確かに性格はきっぱりとしているし、厳しい。でも、キャプテンは心の底から優しい人だ。

だから、そんなキャプテンの優しさをかりるようなことをしたくない。

『キャプテンは誰でもない。風鎖と一緒にいたいんだよ?』

『だけど、好きな人に迷惑はかけたくない。あたしがテニス部に戻ったらちか先輩が辞めてしまうかもしれない。』

部活の空気が変わってしまうかもしれない』

『どうしてちかさんが辞めるって思うの?』

『えっ?それは・・・あんなことがあったし。あたしはちか先輩に嫌われてる。』

あたしが部活に来て、キャプテンがあたしをひいきしたら、ちか先輩はきつと悲しむから』

あたしは部活にいたら邪魔な人間だから・・・

二人の間に入ったらいけないから・・・

『あたしも辞めると思うよ。でもね、あたしが思ってるのは風鎖とは違う意見。』

風鎖の手首を怪我させて、テニス部にこられないようにしたから、罪悪感の気持ちで辞めると思う。

きつとちかさんは今でも罪悪感でいっぱいなんだよ。でも、自分のプライドが許さないから、風鎖には謝れない』

美紀はどうしてこんなことがわかってしまうのか。

ちか先輩のことを知らないのに、どうしてこんなに想像が出来るんだろうか?

ただあたしを励まそうとしてるだけだろうか?

『あたしはちかさんのことはわからない。だけど、風鎖から聞いた感じだと、きつとプライドが高いんだろうな。』

って思ってた。そしたらこんな風に思うかな? って』

『美紀・・・あたし、でも、どうしたらいいかな?』

『まずは、ちかさんに話すことだと思うよ。ちかさんに風鎖の思いを伝えるの。それが一番いいってあたしは思う』

『うん・・・』

そうだよね。

あたしはずっと逃げてただけだよね。

ちか先輩のためじゃない。あたしが恐れてたんだ。

『ありがとう。あたし・・・また皆とテニスが出来るように、今から公園で練習してくる。』

あたしが来たことは、先生には内緒にしてね』

『わかってるよ。がんばってね』

美紀は笑い混じりに言った。

あたしの話を聞いた後も、いつもと変わらず笑顔でいた。

あたしは何をためらっていたんだろうか。

5話

再び公園に行ってみた。

さっきの人たちはマダいるだろうか？

あたしは期待を胸に、公園に向かった。

公園に近づくにつれ、聞きなれた大好きな音が聞こえた。

ボールを打ち合うラケットの音だ。

あたしは急いでそこに向かった。胸が高鳴るのを感じた。

やっぱりあたしはテニスが好きなんだ。

『あれ？さっきの子じゃないか。どうした？テニスやりたくなったのか？』

『はい』

あたしは笑顔で答えた。

今の状態でテニスが出るのかはわからない。けど、今はそんなことはどうでもよかった。

『じゃあ、お兄さんと勝負してみるかい？』

『喜んで受けます』

20過ぎの男の人は、体格ががっちりしていた。

こんな人のボールを返せるだろうか？

コートに立って、あたしは少しだけ不安になった。

『サービスはそっちからでいいぞ』

『いいえ、そちらからお願います』

相手のサーブを打てば、最初に少し力を図ることが出来る。

『いいだろう』

男は少し楽しそうに言った。

サーブによっぽど自信があるらしい。

『そらよ！』

男のサーブは凄まじい威力で、あたしは両腕で打った。

やはりマダ右手だけでは力を出せないらしい。

『おお、返すとは、中々だな』

それからあたしは、ラリーを20回も続けた。

相手の男はわざとラリーが続くようにしていた。

どういうつもりかは知らないが、腕をめいいっぱいに伸ばせば届くところを、易々と見逃した。

『おやおや、1点入れられちゃったぜ』

そういう男の顔は、あまり悔しそうではなかった。

むしろ確信めいた顔をしていた。

それは次の攻撃でわかった。

今度は、右や左に走らせて、あたしを疲れさそうとしてきた。

そうか、つまりあたしの体力を切らそうとしているのか・・・

やっと思図がわかった。

それは今のあたしにとっては最悪なことだ。

『くそっ』

今度は相手はどんなに取りにくいボールも軽々ととりに行った。

がちりとした体にも関わらず、動きはとても軽かった。

どうすればこいつに勝てる？

年が離れてる分経験も積んでいるのだろう。

あたしには打開策が見つからなかった。

『どうした？』

相手は楽しそうにボールを打ち返してくる。

がちりとした相手は、その分力もすごく強かった。

一つ一つのボールがとても重かった。

手首が壊れそうだ・・・

でも、途中でやめたくない。

必死にボールを打ち返したが、結局あたしの体力と、手首に限界が来て、

負けてしまった。

『まあ、君が勝てるわけもないよ』

試合が終わってからあたしに声をかけたのは、ベンチでのんびりとしていた男だった。

『こいつは幼少の頃から天才時と言われていてな。たったの7歳でプロの選手に勝った男だぜ』

『7歳で!』

上には上がいることを知った。

そんなことはわかっていた。

でも、あたしはこの人に絶対勝てると本気で思っていた。

『まあ、君もこのまま続ければきつとすごいプロになれると思うよ』

『その時は、また試合してもらえますか?』

『勿論だ』

あたしはその男と連絡先を交換して、公園を後にした。

気づけば辺りは薄暗くなっていた。

夜道を歩くのは久しぶりだ。

夜道と言っても18時だが、この辺りは一軒家に囲まれていて光があまり入ってこない。

『明日からリハビリ始めようか』

そんなことを考えながら歩いていると、数人の柄の悪そうな男が目に入った。

柄の悪い奴はどこでもいるものなのか。と、あたしは呆れながら思った。

『離して・・・何なんですか』

『嫌がんなよ。悪いようにはしねえ』

聞きなれた女の人の声が聞こえた。

まさかとは思ったが、あたしは急いでそこに向かった。

『ちょっと』

駆けつけると、思った通り

ちか先輩だった。

『風鎖ちゃん』

ちか先輩は驚いたと同時に、助けてというような目をしていた。

『何だこいつ』

『ん？こいつ昼間の女じゃねえか』

『ああ、あのなめた野郎か。そんなに俺らと遊びたいか』

どうやら繁華街にいたヤクザのようで、下衆な笑いを浮かべながら、あたしに近づいてきた。

『誰があんたらと・・・あたしはその人を助けに来ただけだ。あたしが相手になる。』

その人を解放しろ』

『はっ、なめた口利いてんじゃねえ！』

不意の攻撃にあたしは避けることが出来なかった。

さっきの試合で疲れているせいだろうか。

相手の蹴りが見事に腹に命中した。

『ぐあっ』

『風鎖ちゃん！』

ちか先輩が驚いたような声を上げた。

あたしは即座に起き上がり、それと同時に男を一人足払いで倒した。

『うっ』

男は背中をアスファルトの地面に打ちつけ、唸っている。

『てめえ、なめんじゃねえ！』

右側の男が殴りかかってきて、あたしはそれを交わし、攻撃をしかけようとしているもう一人の男を蹴飛ばした。

『ちか先輩逃げてください！』

あたしが叫ぶと、ちか先輩はおどおどしながらも、男たちのそばから離れた。

『動くな』

ちか先輩に気を取られてる隙に、マダ攻撃をしていなかった奴が近づいてきた。

後頭部には冷たい金属の感触があった。

きつと銃をつきつけられているんだ。

不思議と恐怖はなかった。

あたしの頭には、ちか先輩が無事でいてほしいという思いしかなかった。

『な・・・』

ちか先輩は青ざめた顔でいた。

あたしは一人冷静だ。

だが、ここで死ぬわけにはいかない。

あたしには先輩を助けるという目的があり、義務がある。

この男をどうしようか。

きっと他の男も放っておけば直ぐに起き上がってしまう。

それならば・・・

いちかばちかの思いで、あたしは相手に後ろから足蹴りをして、体勢を崩させようと考えた。

その時だった。

『君たち！』

聞きなれてしまった警官の声が聞こえた。

きっと男も警官に気を取られてるに違いない。

あたしは今だ。と言わんばかりに、それを実行した。

『うおっ』

男が体勢を崩したのがわかった。

あたしはくると一回転をして、銃を離させようと手首をチョップしようとした時、

男は踏ん張って体勢を立て直し、それと同時に引き金を引いた。

銃特有のけたたましい音が鳴り響いた。

一瞬何があったのかわからなかった。

あたしの体はあの時よりも大きく右側に倒れこんだ。

右腕がじくじくする。

ああ、そうか。

撃たれたのか。

『ううっ』

頭の中は何故か凄く冷静だった。

だけど、実際には痛みで目も開けられなかった。

段々と意識が遠のいていつて、警官が何かを叫んでいることしかわからなかった。

ヤクザに怒鳴っているんだろうな。相手銃持ってるのに、この警官大丈夫なのか？

意識が遠のいていくまで、あたしは何故かとても冷静だった。

死ぬことに、恐怖を感じていないからか。

いや、きっと腕を撃たれたぐらいじゃ死なないって思ってるからだろ・・・

あたしの意識は闇の中に入った。

6話

目が覚めると白い天井が見えた。
右腕の痛みは消えていた。

『風鎖ちゃん』

声のする方に顔を向けると、そこにはキャプテンがいて、あたしはベッドで寝かされていた。

右腕には包帯が巻かれていた。

あの後病院に運ばれたのだろう。

『良かった』

キャプテンは『本当によかった』と言って、涙を流した。
キャプテンが泣いてるところ何て初めて見た。

『すまない。君がもう目を覚まさないんじゃないかって思って、医者は腹や胸を撃たれたわけじゃないから、死ぬわけがないって言ってたけど、それでも3日も目を覚まさなかった君が心配で……』

『3日？』

『そうだ。君は3日間眠り続けてたんだ。医者は随分疲れているみたいだから、疲労がたまって起きないだけだと
言っていたよ』

『そうですか……』

キャプテンはずっとここにいてくれたのだろうか？

あたしのために……

毎日心配していた？

『それと、君が運び込まれた日に美紀って子が来てね。初めて会った俺に『あなたがキャプテンですよね？』
って言ってきて、ビックリしたよ』

美紀が……

そうか。

美紀にもまた心配かけちゃったんだ。

『それにしても、いい友達をもっているね。幼馴染なんだって？ 凄
い勘の持ち主だね』

『えっ？』

美紀はキャプテンに何を話したのだろうか？

尋ねようかと迷っていると、扉がノックされた。

『はい』

返事をすれば、恐る恐る扉が開いた。

そこには、花束を持ったちか先輩が申し訳なさそうな顔で立っていた。

『ちか先輩』

『ちか』

ちか先輩は名前を呼ばれて一步一步中へ入ってきた。

『あの・・・あたし、風鎖ちゃんに、今まで嫌がらせとか、色々迷惑ばかりかけて・・・』

それなのに、あたしのことを体をはって助けてくれて・・・あたし、
本当何て言ったらいいか』

ちか先輩はうつむきながら、震える声でぽつりぽつり言った。

あのちか先輩がこんな顔を見せる何て・・・

『ちか先輩、顔を上げてください。何も気にしないでいいんです。
こんなことになったのは

あたしの責任です。あたしが調子に乗っただけです。自分なら勝て
るって相手を見縊ってたんですよ』

『でも・・・あたしがあんな人たちに絡まれてなかったら、貴女は
こんなことにならなかった。

それに、あたしのせいでテニス部も辞めた。手首を怪我させてテニ
スを出来ない状態にして、貴女を追い詰めた。

それなのにあたしは貴女に優しい言葉の一つもかけてあげられなか
った。それどころか、あたしは貴女に皮肉ばかり・・・』

ちか先輩は涙を流しながら、震える声を必死に抑えて言った。

キャプテンはただ黙って聞いていた。

『あたしはちか先輩のこと好きなんですよ。ずっと憧れてた。こんな素敵な人とテニスが出来るってだけで、嬉しかった。だからあたしは喜んで二人から身を引いたんですよ』
半分本当で、半分嘘だ。

『どうして？あたしは貴女に許されないことしたのよ。それなのにそんなあたしをお好きでいられるはずがない。』

あたしのこと憎んだんでしょ？だって貴女たち両思いだもんね。あたしが間に入って邪魔してただけだもんね。

貴女が身を引く必要なんてこれっぽちもないじゃない』

『あたしがキャプテンと付き合わなかったのは、他にも理由がありますよ。あたしは・・・』

あたしが説明しようとする、それを遮ったのはキャプテンだった。

『その話しは俺からさせてくれないか？美紀ちゃんから聞いたんだ。全てな・・・』

キャプテンは少し悲しそうな顔をした。

自分がわかってあげられなかったことに悔しさを感じているのか。

キャプテンはあたしが美紀に話したことを話した。

ちか先輩は黙って聞いていた。

『風鎖ちゃんに一言だけ言わせてほしい。俺と釣り合わないからとか、考えないでほしい。』

俺は別に君よりも優れているとは思っていない。テニスの強さの違いというのなら、逆に俺は君の方が優れてることに悩むよ』

『釣り合わないのは、今のあたしの生活ですよ。キャプテンもご存知の通り、あたしは毎日ふらふらしてます。』

そんなあたしとキャプテンが付き合ったら、キャプテンはどう思われますか？あたしはキャプテンが悪く思われる

ことが嫌なんです』

『そんなこと・・・』

二人の答えに辿り着かない言い合いに、ちか先輩が痺れを切らしたように口を開いた。

『聞いてて呆れるわね。要するにあなたたちはお互いのことを考えすぎて一歩が踏み込めなかったんでしょ？』

風鎖ちゃんが考えるようなことじゃないわ。それに貴女はテニスが出来ないから毎日そんなことしてたんでしょ？

それとも好きでやってたの？』

『いえ・・・』

『そうでしょ。なら貴女は何も心配することないじゃない。それで貴方よ』

ちか先輩はキャプテンの方を人差し指でビシッと指すと、強い調子で言った。

『好きなら強引にでも奪いなさいよ。貴方が一歩を踏み出さないから、風鎖ちゃんは貴方の元にいけなかったのよ。』

どうせテニス部に戻れ。君が必要だ。何て言ったんでしょ？そんな相手が逃げるようなやり方をするから

逃げられるのよ。テニス何ていい。だけど俺の傍にいてくれ。ぐらい言えるようになりなさい！』

『あっ、ああ・・・』

ちか先輩の迫力にあたしとキャプテンは驚いて言葉を出せなかった。さすがちか先輩だ。

少しして冷静になった時に、あたしはちか先輩がいつもの調子になってくれてよかったと思った。

『あたしが応援してるんだから、あなたたち上手くないと許さないわよ』

ちか先輩は笑顔でそう言った。

心の底からあたしたちのことを許してくれたんだ。

『風鎖ちゃん』

キャプテンは真剣な声で言った。

『改めて言うよ。君のことが好きだ。俺と付き合ってほしい』
あたしは少しだけ躊躇ってから・・・

『あたしのことを幸せにしてくださいね』
と、笑顔で言い返してやった。

『貴女ってやっぱりいい好きじゃないわね』
ちか先輩は笑いながら言った。

またこの二人と仲良くなれてあたしはとても嬉しい。
色あせてしまった日々に、二人は綺麗な色を混ぜてくれた。
仲直りも出来て、幸せな気分になっていると、再び扉がノックされ
た。

『失礼します。姫路風鎖ちゃん。目を覚まされてすぐに悪いのです
が、事情聴取をさせてもらってよろしいですか？』

『あっ、はい・・・』
思い出したように右腕の包帯を見た。

『風鎖ちゃん』

キャプテンは不安そうにあたしの名前を呼んだ。
あたしが何かをしたわけじゃないんだから、心配する必要なんてな
いのにな。

『それではこちらへ』

警官に案内されるがままに、廊下を歩いた。

そういえば、あの時の警官はいないのだろうか。

なんとなくそんなことを考えた。

病院の一階の会議室のような一室に連れて行かれた。

その中には警官が二人向かいあって座っていた。

こちらを背にして座っている警官は・・・

『何で事情聴取受けてるんですか？』

『ん？』

警官は不思議そうに振り返ると、あたしの顔を見て嬉しそうな顔に
なった。

『良かった。目が覚めたんだね』

警官は涙目になりながら、心底ほっとした顔をした。

『すまない。私がついていながら君にこんな怪我を・・・』

警官はそれから申し訳なさそうな顔をした。

こんな感情的な警官他にいるだろうか？

あたしは何だか可笑しくなった。

『何謝ってんのよ。あなたがいなきゃあたしは死んでましたよ』

あたしは笑いながら言った。

『そうだけど・・・』

『そこは否定してよ』

そんなやりとりをしていると、警官と相対している。

いかにも偉い警官が呆れたように溜息を吐いた。

それはもしかしたら安堵の息だったのかもしれないが、予想も出来ないような微笑を浮かべていた。

『もういいかね？』

それからまた真剣な顔になって、威圧的な空気をかもしだした。

その空気に気づいた警官は、慌てたように立ち上がった。

『君は出ていって。姫路は座って』

『はい・・・』

あたしは少しだけ真剣な顔になった。

威圧に負けているのか。

ただ真剣にならないといけない場だからか。

さっきまでの笑顔は消えた。

『まあ、さっきの奴に聞いたから君にはあまりきくことがないのだが・・・』

『ちか先輩には？』

『聞いたよ。詳しくな。私個人としてはどうしてあんな無茶をしたのか。ってことが聞きたいがね』

『そんなの決まっていますよ。知り合いが絡まれてるからじゃないですか。あなたも助けますよね？』

確信めいた質問を返すと、相手はまた少しだけ表情がゆるくなっ
てから言った。

『もちろんだ。私は警官だし。それ以前に一人の人間としては当然
だ。しかし場合を考えなさい。君は銃も何も持っていない
女の子だ。あの時本当に死んでいたらどうした？』

『そのときはそのときですよ』

あたしはあっさりと言った。

本当にその時は死んでしまうかもしれないと思った。だけど自分
でも驚くぐらい冷静だった。

きつと死を覚悟していたんだと思う。

『そうか。君は警官に向いているな』

『あたしはなりませんけどね』

『そうか。残念だ』

意外とフレンドリーな人でびっくりした。

あたしがフレンドリーになったことにも驚いたが・・・

事情聴取というほどのことはせずに、あたしは解放された。

扉を開けると、外には警官が待っていた。

『何してるんですか？』

『君と話しがしたくてね』

『警官のあなたが何ですか？』

『警官としてではないよ。斉藤和夫という一人の人間としてね』

『あっそう』

あたしは覚めた口調で歩き始めた。

斉藤は慌てたようにあたしの後をついてきた。

『この前補導しようとした時は本当に悪いと思ってるよ。君みたい
な問題児は初めてだよ』

斉藤はバカにするように笑った。

『問題児って失礼ですね。それに、普通に警官としてですよね？』

『まあ、いいじゃないか。それより、君は平和の心を持っている。

それに、君ならきつと町から不良を減らせる。

警官になってみないか？』

『警察官ってそんなに人員不足なんですか？さっきの人にも言われましたよ。でも・・・あたしは絶対になりませんよ』

『なぜだ？』

斉藤の顔には、驚いた表情と、少しの悲しみがこもっていた。

『だって、あたしは最強のプロのテニスプレーヤーになるんですから』

あたしは満面の笑みで、自信満々に言った。

決まっている。何を今更聞くんだ。そんな感じだ。

だってあたしの夢は昔から変わってないんだから。

『そうか。それは残念だな』

斉藤は微笑みながら言った。

それが『がんばれ』と言ってるように思えるのは、あたしの勘違いだろうか？

『それじゃあ、もう無茶なまねはするんじゃないぞ』

そういい残して、斉藤は去っていった。

あたしは病室の前で気持ちを改めた。

『『おかえり』』

二人は笑顔で言ってくれた。

あたしは今やっと自分の居場所に戻れたんだ。

最終話

その後怪我が完全に治るのと、テニスが出来るぐらいのリハビリを兼ねて、あたしは退院するのに2ヶ月余りかかった。

もうとっくに寒い季節になっていて、二人はもう引退してしまった。毎日のようにお見舞いに来てくれた二人。

最後の大会の話を聞いて、あたしは心の中で涙が出そうになった。自分も一緒に出たかった。

この人たちと一緒にまたテニスがしたかった。

だけど、それは勝手にあたしが避けたことで、もう月日は戻ってはいない。

二人は退院したら一緒に試合をやろう。と言ってくれていた。

退院の日に、キャプテンは昼に迎えに来てくれた。

『もう授業終わったんですか？』

『ああ、もう受験生だからな。いや・・・まあ、いいじゃないか』
キャプテンは少し意味ありげにごまかした。

『今から学校に向かうぞ』

『えっ？制服とか持ってないですよ？』

『その必要はない』

キャプテンは楽しそうに言った。

あたしは何か何だかわからなくて、ただ疑問符を浮かべるだけだった。

学校に着くと、キャプテンは裏門に周った。

『あの・・・本当にこんな格好で大丈夫ですか？』

あたしが言うも、キャプテンは何も言わずに、ただすたすたと歩き続けているだけだった。

裏門を少し行くと、テニスコートが段々見えてきた。

ひよっとして、学校で試合をしようとしても言う気だろうか？

そう思っていると、テニスコートの周りに、たくさんの人が集まっているのが見えた。

近づいていくと、それがテニス部の皆だと言うことがわかった。

『えっ？キャプテンこれどういうことですか？』

『風鎖！』

一年の皆は、あたしを見ると、笑顔で走ってきた。

『風鎖もう大丈夫なの？』

皆嬉しそうに心配の声をかけてくれた。

『うん。ありがとう・・・それで、これは？』

『へへ。風鎖のためにキャプテンが考えてくれたんだよ。もう、妬けるなあ』

一人がちやかすように言った。

『本当よね。風鎖ちゃんにメロメロでもう見てられないわ』

ちか先輩が笑い混じりに言った。

『いや・・・まあ、そういうことだ。退院祝いと、風鎖ちゃんのテニス部復帰と、そして・・・』

『何ですか？』

キャプテンは恥ずかしそうに言ってから、まじめな顔になって、口を閉ざした。

『新副キャプテンに選ばれた記念として』

『副キャプテン？あたしが？』

『風鎖ちゃんにぴったりだよ』

『風鎖ならどこまでも着いていくよ』

『俺をささえろよな』

2年の風間先輩が、新キャプテンのようで、少し偉そうに言った。
た。

テニス部の皆が凄く暖かくて、あたしは言葉に出来ないほどの感謝の気持ちがかみ上げてきた。

『皆・・・』

何かを言おうとしたが、涙によってそれは阻まれた。

『何泣いてんだ』

キャプテンは少しだけ慌てたように言った。

『嬉しがってるんでしょ。しっかりしなさいよ』

その様子を見て、ちか先輩からのきつい喝が入った。

こんなに素敵な仲間を、あたしはどうして捨てようと思ったのだろうか。

こんなに温かい仲間に、どうして自分の気持ちを話そうとしなかったのだろうか。

『キャプテン、あの時の試合の続き。しましうか』

『望むところだ』

終わりよければ全てよしとはこのことで、最初に言ったあたしの考えは今、全てが覆った。

あたしは今生きてることが凄く楽しい。

自分の目標に向かって、毎日頑張るとはどれほどいいことか。

明日に向かって、あたしは今日も仲間と共に歩み続ける。

いつか、目標を達成できることを信じて・・・

こんな話しはしても意味がない。

というよりも、あたしがこんなことをすること事態に意味がないの

だが・・・

なんとなくあいつに言われた言葉が頭の中をよぎった。
だから、今回だけだと決めて、やってみることにした。

平和活動。

警察のために市民が出来ること。

それは、万引きを目撃した時に、店員に知らせるといっても小さなことだ。

しかしながら、普通の人たちは、後が怖いからということで、見て見ぬフリをするだろう。

『それ、貸しなさい』

鞆にガムを入れようとした高校生のヤンキーは、あたしの顔を見ると、『何だこいつ』

とでも、言わんばかりに睨んできた。

『この人万引きです！』

あたしはそいつを睨んでから、あざ笑うように鼻で笑い、そう叫んだ。

ヤンキーは逃げようとしたが、あたしはそいつの手首を離そうとはしなかった。

『くそっ。離しやがれ！』

ヤンキーはそう叫んだが、その叫び声も虚しく。

大柄な店員が店の奥から足早に近づいてくると、ヤンキーを見下ろした。

『ちょっとこっちへ来なさい』

ヤンキーは怯えたようにおとなしくなった。

それを見越して手を離すと、あたしは何事もなかったように店から出て行った。

長いしてあいつが来るのは困る。

今回はたまたまそういうことを目撃しただけで、ただの気分だ。

あたしは平和活動をしようとはこれっぽちも思わない。
ましてや、警察の手伝い何てする気にもならない。
今日はただとても気分が良かったただけだ。

そんなくだらない話を出来るほどに、あたしの元気は、あたしの
平和は、あたしの日常は戻った
ということだ。

あたしの居場所は明確に存在している。
そんなただの日常の出来事に過ぎない・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4806y/>

居場所は・・・

2011年11月14日00時36分発行